

バングラデシュにおける隊員活動と今

平本 洋康

(18-1, バングラデシュ, 小学校教諭, 札幌市立西白石小学校)

みなさん、はじめまして。札幌市立西白石小学校平本洋康と申します。活動報告なんです、派遣国書いてませんね、バングラデシュ国です。平成 18 年度の一次隊の採用の中でも最高齢、39 歳で受けて、40 歳で行って帰ってきて今 43 歳です。

それでは、報告させていただきます。

要請と活動概要ですね。要請内容は最初こんなものでした。コックスバザール県は、私が行ったところなんです、県の名前であって、都市の名前でもあります。美術を教える教師が少なく、よって隊員が URC で、これは教育研究所の中の教員の養成機関であったり、教員の研修機関です。現職教員のトレーニングの実施、学校の巡回指導などを通して美術教師の質の向上を図る。また、これらの地域にはこれまでサイクロンによる大きな被害が度々あった。隊員は台風や地震に対する防災訓練や広報活動も積極的に行うというものでした。駒ヶ根研究所にいた頃ですね、一度 JICA の衛星を通してテレビ会議ですか、バングラデシュオフィスとテレビ会議をしたときに、ブリーフィングで調査員の方から、(バングラデシュでは) 私が現職(教員)隊員の第一号で小学校教諭という職種で行くのも初代だったんですけれども、そんなこともあって、図工にこだわらず、あらゆる教科を支援してもらいたいということで行きました。それで最初は、準備として図工とかの道具をもっていったんですけど、一回出国する前に(自宅へ)帰ったときに、慌てて車庫の中にしまった、他教科の指導案集とか教材集とか慌てて持っていった覚えがあります。

前半、最初の一年は、URC というのが教員・教育研究所、PTI というのは教育委員会だと思ってください、でのトレーニング、URC では、一般教員とあと新卒教員のトレーニング、PTI の方では教員をトレーニングする教員、先生たちの指導主事のような方々のトレーニングです、をしていました。あと、シャヒッティカ小学校というのは、URC の、私のオフィスの附属小学校で、そこでの授業支援と、それから、あと日本の子どもの国際理解支援とかというようなことをしてきました。

後半は、前半の活動に引き続いたり、引き続いてやっていたものと、インターネットライブ授業というのは、JICA 札幌オフィスと、それから私の勤務校であります西白石小学校から、出国前に出された宿題のようなもので、JICA 札幌オフィスとしては、北海道で、私の 18 年度からすごくたくさんの教員を派遣するようになったんですよ、北海道は。それで、現職教員を派遣することで、このようなメリットが、日本の子にもありますよ、ということを紹介してもらいたい。そのために、ぜひこのインターネット回線を使った交換授業をしてもらいたいという宿題を出されて、でもそれで「はい」というわけにもいなくて、

それを組み立てていくまでに先生も教育しないといけないし、子どもたちもやっぱり、バングラデシュ側もはじめてのことだったので、いろいろ準備があったんですけど。

それと先ほどご説明されてた授業公開とかもしました。

では、それらについてちょっと詳しく説明しますね、URC、PTI では、教員向けトレーニングをしたんですけども、ご存知のようにものすごい人口のある、北海道2つ分の場所に日本の人口よりも多い人たちが住んでいる。子どもたちの数に教員の数足りない。1クラス80名から120名ですか。全校の先生は3名しかいないとかいう学校も中にありました。そんな中で、先生の質というのがとてもやっぱり日本の質とはちょっと違う。この(左手指の) 関節ありますよね、「1、2、3、4、5、6、7、8」でやって、全部やったら20ある。そしたら(右手指の) ここに20が1つとしてやって、400までこうやって数え足しで数えるので、繰り上がり、繰り下がり、補数の概念がないです。まず算数は。そんな中でこれ、この写真は、いくつといくつとって、10個のおはじきをもって、3が出たらこちらいくつ?そういう補数の概念を教えるのもたいへんでした。繰り下がり、繰り上がりというのできるようになる、させるのが1つちょっと目当てかなと思ってそのあたりをやっていた頃です。

そのほかにPTIで指導主事室の方々に向けて「English Pronunciation training」をやったんですけど、発音(の授業)なんですが、楽しい授業、面白い授業を子どもに、分かる授業をさせてほしいって、私もブリーフィングのときにいわれたんですけど、先生たち自体も暗記中心の授業で教わってきてるんです。ゲームをさせたこともないし、してもらったこともない先生たち自体が「楽しい授業」ってどんな授業か分からないですね。それで、先生たちに子どもの役になってもらって、私が先生になって、ゲームをしたりとかしました。

あと、新卒向けにトレーニング講座を作ったりしました。そんなところですが、やっぱり、メモライズ、暗記中心の授業というのをなんとか変えたくて関わってきました。あとこのトレーニングの講座なんですが、赴任後3日目に僕はすぐ、120人を前に図工と体育をやしてほしいといわれて、できませんと言うわけにはいかないので、やりましたけど、今になればいい思い出です。それで、その様子です。先ほどの、後半の活動のときの、このお年寄りというか、いったらなんなんんですけど、先生なんですけど、繰り下がりの引き算のレディネステストのようなものをしているのですが、繰り下がりの引き算がちょっと出来なくて、カンニングされてるんですね。「カンニングしてても教えられるようになりませんよ。私、お教えしますから一緒にやりましょう。」と教えてるときに停電になって、これ6時過ぎなんですよ、ろうそくを持ってやってるんですけど。5時で先生たちが帰るんですけども、帰国直前に1月だったと思うんですけど、これは。だんだん先生たちの方から「ヒロの講習はなんか良さそうだ」というふうにいってもらえるようになって、6時過ぎでも先生たちが残ってくれて、ぜひやってもらいたいといわれて続けていたところ。暗い中ろうそくを使ってやりました。

最終的には、ここのトレーニングが1月とか2月とか多かったです、最終的にはやっぱり「ティーチング ウポコロン (ベンガル語で「指導教材」の意)」、まあ、「教材作り」ですか、先ほど、「ハンズオン素材」の話もありましたが、バングラデシュの先生たちは、本の挿絵を大きく写すことが教材作りだと思われているところがあって、よりよい教材、分かりやすい、楽しい授業を進めるための教材作りっていう、ちょっとそういう感覚がなかったんですね。それで、自分たちも教えやすくなるんだよ、というような教材作りとか、あと黒板に書いてあるのは、繰り下がり引き算を効率的に教えるような、一年生を持たれた先生のためのものです。こんな教材を作っておいてきました。

附属小学校では、授業のマンパワーみたいになってたんですけど、上司の指導支援したり、あとインターネットライブ授業のちょっと事前指導をしたりとか、あとハンズオン素材についての授業に関わっやっていました。で、シャヒッティカ小学校での指導ですが、これなんか、先生が子どもたちを動かしてるように見えると思うんです。現地の先生が。ここまでするのに、やっぱり関わって、先ほどの何人かの先生とか発表の中にもあったんですけど、「ぶって教える」。例えばこの一番奥の下の、歌の練習のときですか。これあの一、インターネットクラスのときに「小さな世界」ってあのディズニーの歌をベンガル語に訳した隊員がいて、その歌を発表させるのに、なかなか8ビートが取れないですね。日本の子どもだったら簡単に叩けると思うんですけど、やはり民謡で育っているのこの歌いながらこういうクラブができないですね。あとこういう体を揺すりながら歌うのも難しくて分からない。バングラデシュの先生が「右！左！、右！左！」とかいって、(後ろから) こうやって子どもたちを動かしたりしたら余計に歌えなくなる。それから、先生の望むことをしないとぶたれるので、もう怯えながらだったんで。そして歌を教えるときも一人の先生はこんなことを言いました。「ヒロさん、私なら1時間で歌わせることができるんだよ、ちょっとぶってやればみんな歌うようになるんだ」というふうに言われた先生もいたし、それからある日にですね、テストのあとに子どもを並べて竹の鞭で叩いている先生がいたんですよ。「どうしたんですか？」ってお話したら、「この子達の算数の成績が40点以下だった」と「私があんなに教えたのに・・・」というようなことをおっしゃるんですね。で、私の授業では、これ全部私が中心になってやったんです。「わたしの授業で叩くことはやめてください。子どもたちはサーカスの動物じゃないですから。」って言って、叩かないで教える、それから子どもに委ねる。下の先生は私のやることを分かって子どもを見て支援してくれるようになって、見て子どもを動かして、で先生たちも子どもたちもこうやって動く、子どもたちも考えて動くんだ、と分かるようになってからは、少しずつ私(の目の前で子供)に対する指導のあり方とか、私の前ではあまりぶたなくなったような気がします。

インターネット・ライブ授業だったんですが、こちらが(向かって右)日本の子ども、向こう側(向かって左)がバングラデシュの子ども、「私たちは、朝起きたらお祈りします。」などの一日の生活をバングラデシュの子供たちが紹介しているところです。下のようにテ

レビ 2 台を使って交流しました。これは（下の写真は）札幌事務所の様子です。バングラデシュの先生たちにも研修でした。これは私たちの研究会です、それから子どもたちにも日本の国の贈り物なんだよと伝えていました。バングラデシュの方々の多くは JICA をどっかの NGO だと勘違いしてる人が多くて、JICA は有名なんですけれど。これは JICA の広報でもあると思ったんで、そのあたりも心得てやりました。あと 4 年生の社会の教科書には、「たくさんのアジアの文化」の教材のなかに、一番最初に日本が出てきて、5 ページにもわたって紹介されています。「日本の歌は演歌といいます。音頭といいます。」ってなかにあって、「『演歌』歌って、『音頭』歌って」って言われて困ったんですけど。教科書の中に「茶」とか「剣道」とかの説明があったんで、ある日家から急須を送ってもらって煎茶を入れて、羊羹をご馳走したんです、先生たちに。そうしたら「『茶』はもう分かったよ、次は『能』をやっ」っていわれて私も困ったんですけど、それは今となってはいい思い出です。

写真のように、バングラデシュの子どもたちには、「あなたたちが大使だから、日本の子ども達に会う最初のバングラデシュの子どもたちだから、行儀よくしていなさい」といって、連れていったんです。テレビが 3 社でしたか、新聞が 2 社くらいきて、私のインタビューもテレビに「BTV」っていうバングラデシュの NHK みたいなテレビに写ったら、今まで、私のことをなんか変な日本人だと思ってた人まで声をかけてくれて、なんか「すごい立派な仕事してるんだね」とか床屋さんに言われたりして、やっぱりテレビってすごいなと思いました。で、これは日本の様子なんですけれども、今僕、この子達の担任をしてるんですが、このときの子どもの様子が、あまり芳しくなかった。やっぱりインターネット・ライブ・クラスをするためには、受け入れ側の態勢も必要なんだな、大事なんだなと。ご覧になってた方がこの中にもいらっしゃるんですけども、やっぱり日本の子どもの態度があまりよくなくて、それが私今ちょっと、今だったらもうちょっといい状態のところの子どもたちを見せることができると思うんですけども。ご覧になった日本の方々が、日本の子どもたちについてちょっと、「バングラデシュの子どもたちの方が立派だね」、っていわれていたのが教員としての私はとても気になってたところでした。

で、それからハンズオン素材なんですけれども、これなんです、先ほど説明があったので、まあだいたいバックグラウンドのようなものなんですけれども、ハンズオン素材については、本来、教材開発というのは、児童の実態があって、教員の願いがあってそれに向かうためにどのような教材を開発をしたらいいかというふうにして考えなければならないですよ。はじめに児童の実態があって、この子達にはこのようなことを教えていきたい、身につけさせたい。それで、こういうふうな目指す子ども像に沿って教材開発をする。なんですけど、今回はめざす子ども像も、児童の実態よりも、まず教材が、教材をバングラデシュの子どもたちにどういうふうにするかというふうな課題のあり方で、ちょっとたいへん、困ったのが事実です。なんです、JICA バングラデシュ事務所として受けた仕事ですし、ええと、そうですね、現職教員、私の次の年に、横浜の猪俣教諭が、バングラデシュ

に来たので、2人で、「2人も現職教員がいながら、このくらいの授業実践か」、と言われる訳にもいかないというやはり私たちの想いもちながら取り組みました。

で、この中で一番大変だったのが、他隊員への指導をお願いされたんですね、調整員の方から、あ、で、すみません、鳴ってしまいましたが、これが結構大変でした。で、ええと、ちょっと急ぎますね。で、私が授業した訳ではなくて、私はティーム・ティーチングで入ったんですけれども、手前の女の先生が授業をしています。

それから、ええと、サイクロンの防災カレンダーの製作、ええと、これなんです、ええと、災害、あの大きな災害になってしまったんですが、なんの備えもないんですよ。それで、ええと、PC 隊員とか家を失ってしまった友人の意見を聞きながら、チタゴン・ポリシャル・コックス・バザール常襲地域3点を結んで、で、日本には「備えあれば憂いなし」、これ日本語で書かれているんですけれども、これ帰国後、ええと、頼まれて訳したもので、で、現物はこれなんです、全部ベンガル語と、で、ええと、字が読めない、これが元々、ええ、赤十字（赤新月）社から出来たものなんです、こんな字も読めないパンフレットで人々は何をしたらいいのか分からないから、それで、このように絵を中心に、写真を中心にしたもので、ええ、字が読めなくても分かるように。それから、こうやってたただ置いておけるように、後々困らないように、「備えあれば憂いなし」のようなこと、「コシュト ナ コルレ コシュト メレナ」（苦労しないと何かいい結果は得られないよ）というような、バングラデシュの諺なんかも入れました。

それから、これ日本の子ども達に向けて出し、月に一回発行してた、下まで映んなかったんですけれども、ええと、通信です。こういうのを月に一遍ずつ、ええと、最終的には二十何号までいったのでしょうか。

それから、私の、協力隊参加の動機の一つとして、「自分しか行けないところに行って、助けを求めて、助けが欲しい子ども達の所に行って、文字や数を教えたい」という想いはずっとありました。それで、これは、ええと、なんですか、ボランティア中のボランティアなんですよ。ええと、勤労少年とか少女を集めてですね、文字と数をやりました。で、ベンガル人の手伝いとか、あと賛同する同隊員がこうやって来てくれてやったりしました。ええと、真ん中の端の真ん中の写真はベンガル人のボランティアだったんですけれども、結局彼には定着しなかったんですよ、僕がいなくなった後やってもらいたかったんですけれども、外国人と一緒に活動したかっただけだったみたいで・・・。

はい、ええ、で、ええもう鐘が鳴ってしまったので、これはこんなことをこれから考えていけばいいんじゃないかなっていう、もので、後から読んで頂けたらいいかなって思っています。

サイクロン防災教育隊員としては、やっぱり家族を動かすために、一番強いのはお父さんで、お父さんを、こう教えていくっていうのが大変で、これをただ、ええと、資源に出されたら困るんで、一人一人お父さん達を集めて説明して手渡ししてました。

これもちょっと鐘が鳴ってしまったんで、すみません。日本の子ども達、バングラデシ

ユの子ども達を見て、日本の子ども達の、何が足りないのかっていったら、「生きる力」かなあ。ええと、例えばバングラデシュの子ども達、バケツひっくり返したら道具なんてないんですよ、なんか紙か布かなんか持ってきて、一生懸命吸ってバケツかなんかに捨てて、始末出来ると思うんですよ。日本の子ども達はおそらく、じっと暫く見ている、先生の指示を待っている。その辺りで、やっぱりコミュニケーション能力とか表現の仕方も日本の子ども達、だんだん問題のなってきたるかなあって、今考えて、バングラデシュのその辺りを見つけ、良い所をちょっと、日本でも、ええなんですか、見習おうかなって、実践しているところです。

はい。ええ、後は、ですね、そうですね、おわりになんですが、私派遣の間、二度交通事故に遭って、二度空き巣に遭って、コレラにもチフスにもなって、骨折もしてですね、えー4回入院してですか、とてもバングラデシュでは有名な人になってしまったんですけども、前半の一年間は。でも、帰国もせずに、ええと、先程のどなたかもおしゃってくれましたけれども、人と繋がって支えられてきました。友達とか、ベンガル人の人達とか。で、ええと、「そんな苦労して大変だったね」と言われるんですけども、それに代えられないものがこの隊員活動の中にはあったんじゃないのかなって思います。

ええと、とてもこれから行かれる方々、えー楽しみだと思うんですが、食べ物なんです、バングラデシュのコックスバザールはミャンマーの方々が大勢いたので、麺の文化があったり、チマキがあったり、とても、あの一、バングラデシュ派遣の方がいらっしゃたら是非コックスバザールを訪ねてみてください。終わります。